

国家と権力のウソに欺されない 21 世紀の読み解き方

トマス・ピケティは、「課税で公平を実現してはいけない。国家の過程で人間の収入の平等を実現するというには、とんでもない考えだ」という。

それは暴力装置によって平等を実現するということだからである。国家社会主義である。「富の再配分機能」という言葉。課税による富の再配分で平等社会を実現する、課税によって富裕層からたくさん取り、福祉を必要とする人たちに回すという理屈である。

格差の是正というのは、その国が、経済成長したときにできるものである。ある社会が成長、繁栄したときに、その程度に応じて平等は実現される。国家制度や課税制度によって平等を実現するというのはとんでもない考えである。今の日本がまさしくそうである。もう30年も不況が続いている。

要するに国家と社会の関係を混同している。産業社会以降になると、原則として国家と社会の両方がある。たとえば狩猟採集社会だったら、社会しかない。国家などない。

農耕社会だと、社会と国家がある場合とない場合がある。東日本大震災の直後は、ある期間、日本でも「国家」は不在だった。ところが国家は不在でもみんなとりあえず生きていけた。行政機能が低下したという意味である。

ルソーは人類（人間）の絶対平等主義を唱えて、このあとフランス大革命を起こした。この思想が、その後のファシズムになっていった。全体主義とファシズムの生みの親はルソーである。

日本ではルソーの「エミール」を教育学部などでは必読書にされていて、優れた教師になるための指針にしている。なんでもかんでも人間は皆、善であり平等という思想の教祖である。

ルソーは、一般意志（普遍意志）という理論をつくった。人は生まれたときに、この一般意志によってフランス国と契約を結んだ、としている。これを拒否することはできないと書いている。

この恐ろしい、後のファシズムの思想がヨーロッパ社会を覆った。このあとのフランス革命で貴族制度が廃止され、その結果、トリクルダウンの法則がなくなった。今の日本の保守派も本心は、このトリクルダウンである。

日本では人権と自由思想の旗手のように教えられているルソーこそは、今の国家悪の権化である。最近ではトリクルダウンを否定するのが流行のようである。しかし長期スパンではトリクルダウンなくして資本主義の発展はない。

「崩れゆく世界 生き延びる知恵」 副島隆彦×佐藤優共著より一部引用